

「統一せず、独立せず、武力を用いず」

台湾の新総統、馬英九氏(57)は昨日の就任演説でこう述べ、中国との関係について現状維持の立場で臨む姿勢を強調した。

この「三つのノー」は、3月の総統選挙の前から発言してきたことだが、中台関係の基本路線を改めて鮮明にしておきたかったのだろう。

独立志向が強かった陳水扁前政権の時代には、いら立つ中国との間で関係は冷え込んだ。8年ぶりの国民党政権の誕生を、中国は歓迎している。台湾海峡はしばらく波静かになりそうだ。

馬氏は、中台間の週末チャーター直行便を7月から始めたいなどとし、「兩岸(中台)関係を新しい時代に入らせる」とも述べた。政治的な問題は前面に掲げず、対中投資の規制緩和など経済の面で結びつきを強めていこうという政策だ。

そのための関係改善はすでに動き始めている。馬政権のナンバー2、蕭万長副総統が就任前の4月、中国を訪れて胡錦濤国家主席と会談している。また、国民党トップの呉伯雄主席も近く訪中する。

だが一方で、馬氏は米国との緊密な関係を強化していくとし、国防力整備の必要も指摘した。交流は広げますが、中国による武力統一への警戒は緩めないということだ。

台湾海峡が安定することは、日米や周辺国にとってプラスだ。今後の中台対話を通じて、軍事的な緊張緩和にも一歩を踏み出してもらいたい。

中国は、台湾との衝突を想定した兵器の拡充や軍事訓練を重ねてきた。台湾の対岸には、千基以上といわれるミサイルを並べている。台湾も対抗して新兵器の開発を進めている。こうした軍拡競争を止め、相互の信頼を高めるような措置はとれないものか。

外交面でも、安定した中台関係に向けて工夫の余地がある。

ジュネーブで始まった世界保健機関(WHO)総会で、台湾が切望するオブザーバー参加は、中国の反対で議題にすらなっていない。新型インフルエンザなど感染症の脅威は、地球全体の問題でもある。人道的な見地から中国は度量を見せてはどうか。

中台の結びつきが強まれば、投資や物流などこの地域の経済にも大きな変化をもたらすかもしれない。日本企業も目を離せまい。

馬新総統には、歴史問題をはじめ日本に厳しい視線を向けているという見方もあった。だが、最近植民地時代に水利事業で台湾に貢献した日本人技師の慰霊祭に出席するなど、良好な関係を築いていきたいとの意欲を示している。

日本も、中台関係の安定を支えていけるような外交を強めたい。